

留日学生と初期の中国共産党

北京大学歴史学系 王 新 生

甲午中日戦争（日本では日清戦争と称する）以降、多くの志を持つ中国人たちが日本へと留学しており、当時の状況やその影響に関しては多くの先行研究が存在する。留日学生と初期の中国共産党との関係に関する意義ある論文も少なくないが、中国共産党の創立に関わった多くの留日学生は、その後ほどなく離党し、あるいは党に正面から対立するようになった。そのような事実を鑑みれば、上述の課題はより深く研究する必要がある分野だと言え、そこからはまた中日間の近代における交流、および相互の影響関係といった重層的な両国の関係が読み取れる。なお、筆者は上述の課題に関して未だ詳細な研究を行っていない。本稿ではやや初歩的な認識を提起するものであって、実証性のある分析としてはやや不十分な点があると思われる。

一、留日学生による中国共産党の創建

中国共産党成立の過程において、「南陳北李」、すなわち陳独秀と李大釗の貢献が人口に膾炙している。陳独秀は1879年、安徽省懷寧県で生まれ、祖父の厳しい教育のもとで、科挙試験の「秀才」資格を獲得した。15才のとき甲午中日戦争が勃発し、その後、帝国主義列強による中国分割の勢いが激しくなり、戊戌の変法とその失敗、義和団事件や八ヶ国連合軍による北京攻撃などの事件が引き起こされた。1901年10月、陳独秀ははじめて日本へやってきた。早稲田大学の前身である東京専門学校へ入学し学問を決心し、まずは「亦楽書院」へ入っ

て日本語を勉強したが、二ヶ月後には留学生組織「勵志会」に参加した。この組織の本来の目的は知識交流の場と休憩場所の提供であったが、革命の気運が高まるとともに政治的話題が増加し、「穏健派」と「過激派」の争いが出現した。そのため陳独秀はその後まもなくしてこの組織から離脱し、留学生の経営する「訳本匯編社」に興味を持ち、翻訳された西洋社会科学・政治思想理論に関する書籍を大量に読み上げ、また自身で出版社と雑誌社を立ちあげたいと考えるようになった。1902年3月、陳独秀は安徽省安慶市に戻り、安徽蔵書樓図書館を借り上げて演説会を開き、「自由」、「民主」、「平等」などの新たな思想を宣伝し、若者から大きな人気を得た。しかし、当局の注意を集め「危険分子」として逮捕され、同年9月日本へ戻ることとなった。中国人の留学生が憧れていた軍事訓練学校一成城学校に入り、本学校の留学生による革命組織「青年会」に参加し、また上海商務印書館から彼の処女作である「小学万国地理新編」を出版した。1903年3月、陳独秀ら五人の留学生は女子留学生に嫌がらせをしていた清朝政府の駐日留学生監督官の辮髪を切ったため、清政府は日本政府を通じて陳独秀ら三人のリーダー格を逮捕し、日本から強制的に退去させた。上海に戻った陳独秀は章士釗が創刊した『国民日日報』の編集者となり、1907年春、蕪湖での武装蜂起への参加によって逮捕されたが、護送の途中で逃げ出し、三たび日本へ渡った。東京の正則英語学校に入り、1908年秋、中国へ帰国し休暇をとり、同年末再び日本へ戻った。1909年秋、兄の葬儀に駆けつけるため帰国し、しばらく故郷に滞在した。1911年、辛亥革命時には安徽省と浙江省の武装蜂起に参加し、成功の後、安徽省都督府秘書長を務めた。1913年、辛亥革命の成果を奪い取った袁世凱は、国民党のリーダーである宋教仁を暗殺した。孫中山は袁世凱政権打倒のための「二次革命」を起こし、陳独秀は安徽省で孫中山の呼びかけに積極的に応えた。その試みが失敗した後、1914年7月に陳独秀は五回目の訪日を行い、章士釗と協力して『甲寅雑誌』を編集した。1915年6月、妻が死去したことで帰国した。

1914年10月、陳独秀は『甲寅雑誌』で「愛国心と自覚心」と題する文章を發表し、その中で「国民に愛国心がなければ、その国は危険だ。国民に自覚心がなければ、その国は滅びる。両者を備えなければ、その国は国たりえない。中

国人は国家を『五穀豊穡の神』と見なし、愛国を『君主に忠実である』ことと見なすが、そこで人々は天下を統治する者のための『犠牲』に過ぎず、少しの自由も権利もなく、幸せとは言えないのである」と指摘した。彼は帰国した後上海で『新青年』を創刊してその編集にも参加し、民主的・科学的・文学的な革命を提唱した。1917年、蔡元培学長の招きに応じ、陳独秀は北京大学文科学長に就任した。1918年末、李大釗らと『毎週評論』を創刊すると、「二十世紀のロシア革命」という文章を発表し、人類社会の変動と進化の鍵を握る革命としての十月革命の歴史的意義を述べた。「五四運動」の際には逮捕され、その後すぐ釈放されたが北京大学を離れざるを得なかった。そして再び上海へ戻り、マルクス主義を学んで宣伝し、また「ロシア革命とわが国民の覚悟」を発表し、ツァーリの専制を倒す革命を擁護するとともに積極的に共産党組織を創設した。その後の数多くの文章や演説の中で、陳独秀はエセ社会主義とアナキズムを批判し、中国は社会主義の道を歩むべきだと主張する。上海でも当局の厳格な監視を受け、そして広東軍政府に誘われ、1920年12月、陳独秀は香港を経由して広州へ逃れ、現地の共産主義者を指導して共産党組織を創設している。彼の影響は非常に大きかったため、彼自身は中国共産党の成立大会に参加していなかったにもかかわらず、中央局書記に就任している。

李大釗は1889年、河北省楽亭県で生まれた。1913年冬、はじめて日本へ渡り、早稲田大学に入学し日本の社会民主党の創始者である安部磯雄の影響を受け、マルクス主義に触れている。それと同時に、日本における初期の労働運動のリーダーであった幸徳秋水や、日本の著名なマルクス主義学者であった河上肇の著作を読み上げていった。1915年1月、日本が袁世凱政府に対して「21ヶ条の要求」を提出すると、留日学生は集会を開き李大釗を推薦して反対の電報を起草させている。1916年初頭、李大釗は上海に戻って反袁世凱に関する交渉を持ち、二週間後に日本に戻ったものの、同年4月、5月には卒業せずに上海へ戻って反袁世凱運動を展開した。

十月革命が勃発した後、李大釗は「フランス革命とロシア革命の比較」、「庶民の勝利」、「ボルシェビズムの勝利」などの文章を発表し、ロシア革命を賞賛すると同時に社会主義を喧伝した。その後「新紀元」、「平民独裁統治」、「戦後

の世界潮流」、「農村と青年」、「唐山炭鉱工場の労働者の生活」、「現代青年活動の方向」、「現在と将来」などの文章を発表し、マルクス主義を援用しながら中国国内の問題を分析した。特に1919年10月、彼が編集した『新青年』第6巻第5号は「マルクス主義研究特別号」として、マルクス主義を紹介する六つの文章が掲載され、自ら「私のマルクス主義観」を著し、マルクス主義を構成する三要素—史的唯物論、政治経済学、科学社会主義について説明している。

1920年3月、李大釗らは北京大学で「マルクス学説研究会」を秘密裏に設立した。同時に党員を増やして北京共産党の前駆的な組織を設立することに力を入れた。1921年1月、北京党組織は全体会議を開き、組織の名称を中国共産党北京支部と決め、李大釗を書記と推挙した。

「南陳北李」は共に中国共産党成立の第一回全国代表大会には参加しなかったが、共産党の結成に対する貢献は非常に大きいと言える。その他にも「一大」に出席した13名の代表の中には4名の留日学生、即ち李達、周仏海、李漢俊、董必武がいた。李達は1890年、湖南省零陵県冷水灘（今の永州市）の小作農家で生まれ、1913年に留日官費生として東京へ行き、一年後肺病に罹り学業を中断して帰国している。1917年春、再び日本へ戻り、第一高等学校に入学して理科を学習した。1918年4月、東京で日本政府がロシア革命の影響を防止するためシベリアへの共同出兵を準備していた頃、同時に北京の段祺瑞政権には金を貸し付け、かつ「日華共同防敵軍事協定」を密約したというニュースが伝えられると、留日学生は激高しサボタージュの抗議行動を起こしている。三年前に起きた「21ヶ条要求」による「国恥記念日」が近くなると、抗議活動はにわかには活発化し、5月6日夜、46名の留学生は東京の神田街中華料理店「維新号」に集まり、「大中華留日学生救国会」を結成し、反日運動を繰り広げたのである。そこに数十名の警察が突然踏み込み、1905年制定の「清国留学生取締規則」で規定された「集会の禁止」という条款に違反したとして留学生全員が逮捕され、暴行・取り調べの上で釈放された。この事件は「維新号事件」とも呼ばれている。李達も同事件で逮捕されており、釈放された後に帰国し「留日学生請願団」を率いて請願運動を行い、協定の無効を求めて活動している。この運動は失敗に終わったが、これは「中国学生のはじめての請願デモであり、五四運動の前

奏曲であ」⁽³⁾った。

失望した李達は再び東京へ戻り、それと同時に「救国活動」としての理科の探究をやめ、「救国思想」としてのマルクス主義や、河上肇の著作などの学習に懸命に取り組むようになる。1919年、李達のはじめての論文「社会主義とは何か」が上海新聞『民国日報』の副刊『覚悟』上に発表された。そこでは社会主義と共産主義の違いが次のように説かれている。「社会主義は生産と支配を共有し、全ての私有資本を廃棄すべきだと主張するが、しかし全ての私有資産を廃止すべきだと主張しているわけではない。一方、共産主義は全ての私有資産を廃止し、社会が資産を共有し共同で生活すべきことを主張している」。1920年夏、李達は中国へ戻った後、自身の翻訳による『社会問題総覧』、『史的唯物観の解説』、『女性中心説』などの日本の社会主義書籍を次々に出版した。それと同時に、上海共産党組織の建設に積極的に参加し、また「一大」に出席し、宣伝主任に就任し、陳独秀の代理として中央局書記を務めた。

周仏海は湖南省沅陵県で生まれ、1917年日本に留学し、東京で日本語を勉強し、第一高等学校予科に入り、1918年に鹿児島第七高等学校造士館（今の鹿児島大学）に入学した。当時、この学校は自由主義的な学風を備えており、さらには戦時も日本共産党員の文章を教材として使う教授もいたという。そのような校風もあり、周仏海も社会主義に深い興味を持つようになる。上海中華書局から出版された『社会問題概論』を翻訳すると同時に、張東蓀などが編集した『解放と改造』に絶えず寄稿し、社会主義を紹介した。その後、十数篇の論文を続けて書き上げ、新聞や雑誌『民国日報』の副刊であった『覚悟』誌上や、『新青年』、『共産党』などの誌上に発表した。例えば、「社会主義の実行と実業の発展」、「われわれはなぜ共産主義を主張するか」や「政権の奪取」などがある。また、周仏海はよく中国の留学生を集めて演説練習会を開いた。彼の演説能力は極めて高いと言われており、中でも1920年に周仏海は夏休みを利用して帰省した際、その途上で上海を經由し『新青年』の編集部を訪ね、陳独秀と会談し、コミンテルンの代表者ヴォイチンスキーと接触し、共産党の結成に賛成した。日本へ帰った後、陳独秀を通じて施存統と知り合い、二人は中国共産党日本部会を結成している。1921年6月、周仏海は東京の施存統からの手紙を

受けた。その中では、周仏海が7月20日上海で開かれる共産党結成の会議に参加すべきだという提案が記されている。晩年の回顧録の中で彼は共産党結成の会議に参加した口実を長期にわたって帰国していなかったためとしているが、実際には施存統は日本の社会主義者と密接なつながりがあり、大量の社会主義の文献を翻訳して上海の雑誌に発表したことにより日本の警察側から厳密な監視を受けていた。そのため自由な行動ができず、結果として周仏海が1921年7月の中国共産党「一大」に参加することが決められたのである。

李漢俊は1890年湖北省潜江县で生まれ、1904年日本へ留学した。最初はキリスト教系学校の暁星中学に入って学習し、卒業の後、名古屋第八高等学校に入学した。1915年7月には東京帝国大学土木工学科に受かり、中国政府の官費留学生となった。日本では「大逆事件」が起き、社会主義運動が厳冬季に入っていたが、「十月革命」が勃発した後、厳しい社会問題と労働運動の問題を解決するため、第一次護憲運動、第二次護憲運動などといった「大正デモクラシー」が出現した。1918年から1919年まで、堺利彦、高島素之などの社会主義を信奉する学者は『新社会』という雑誌でマルクス主義を紹介している。高島はカウツキーの『マルクスの資本論の解説』を翻訳して出版し、初版として二万冊を印刷するもやがて売り切れ、絶えず再版が重ねられたベストセラーとなった。山川均が編集する『社会主義研究』、河上肇が編集する『社会問題研究』も創刊され、すぐにベストセラー雑誌となった。また『改造』、『解放』などの雑誌も創刊され、人々が社会主義について話し合う事態が出来していた。李漢俊はその影響を受け、専門的学習にあまり力が入らず、そのため成績はごく普通であったが、彼が1918年に帰国した後に発表された文章から考えれば、かなりの努力で社会主義の書籍を懸命に読み上げていたことがわかる。例えば『マルクス資本論入門』などの翻訳本の出版や、社会主義を紹介する論文を90篇以上以上も発表している。張国濤によれば、李漢俊は「我々の中の理論家であり、マルクス経済学説に対して非常に興味を持っている」とされる。董必武は李漢俊を「マルクス主義についての私の先生」と見なしている。⁽⁴⁾李漢俊はその後陳独秀と知り合い、李達とともに上海共産党グループを結成し、また1921年7月に開かれた中国共産党「一大」に参加した。

董必武は1886年に湖北省黄安县で生まれ、同盟会に入り、反袁活動に参加した。1914年1月、日本へ渡り、日本大学に入学して法律を専攻し、中華革命党に参加した。1915年6月、帰国して「21ヶ条要求」に反対し、逮捕され投獄された。1916年6月、出獄し、翌年2月、日本へ赴き法律科の卒業試験に通過し、河上肇の『貧乏物語』などの社会主義作品に触れている。同年の夏、帰国して弁護士事務所を開いた。国民性を改革し、新思想を宣伝するため、新聞と学校を積極的に創設している。1920年、私立武漢中学で学生を募集して授業を始め、マルクス主義を伝え、1921年に中国共産党「一大」に参加した。

上述の共産党の結成活動に直接的に参加した留日学生のほか、社会主義やマルクス主義を宣伝して共産党の結成を間接的に進めた留日学生、例えば、陳望道・施存統・彭湃などもいた。陳望道は1891年浙江省義烏市で生まれ、1915年日本へ留学し、東アジア予備学校、早稲田大学法科、東洋大学文科、中央大学法科で学び、中央大学法科を卒業した。1919年6月に帰国し、英語訳本の翻訳を参照しながら幸徳秋水、堺利彦が1904年に翻訳したマルクスの『共産党宣言』を出版している。1920年8月、上海共産主義グループに入り、その八人の構成員の一人に名を連ねている。組織の活動経費審査の点で陳独秀と対立したため⁽⁵⁾「一大」には出席しなかったが、その後中国共産党上海地方委員会書記を務め、労働組合を組織した。施存統は1899年浙江省金華市で生まれ、1920年6月日本へ留学し、日本語を学ぶ間に、河上肇、山川均らの社会主義的文章を翻訳した。日本滞在中、同志たちと積極的に連絡をとり日本の警察の注目を集め、1922年、中国へ送還されている。彭湃は1896年広東省海豊県で生まれ、1917年6月日本へ渡り、9月に中国の留學生が予備教育を受ける東京成城学校予科に入学して補習を受け、1918年5月の卒業の後、早稲田大学専門部の三年制政治経済科に入学した。「維持号事件」で拘留され、釈放された後帰国した。1923年7月から1925年末まで、広州で農民運動講習所を開き、中国共産党広東区委の委員などを務めた。

言及すべきは中国第一次代表大会、すなわち成立大会である。参加した代表は合わせて13人で、つまり上海代表李漢俊・李達、北京代表張国濤・劉仁静、濟南代表王尽美・鄧恩明、長沙代表毛沢東・何叔衡、武漢代表董必武・陳潭秋、

広東代表・陳公博および包惠僧、日本代表・周仏海などであった。平均年齢は27才であったが、全国の50名以上の党員を代表していた。

二、留日学生 of 中国共産党からの離脱

中国共産党の成立大会で、李漢俊を中心とする留日者とはほかの代表との間で多くの議題をめぐって違いが生じた。まず、「中国共産党の基本的方針がプロレタリア独裁であることを明確に提起するかどうか」という議題について、李漢俊は、世界にはソ連の十月革命、ドイツの社会民主党の革命などがあり、それらの地域の現場を考察し、その後国内でマルクス主義大学などの研究機関を設立し、十分に研究した後に党の綱領を最終的に決めるべきであると考えた。李漢俊から見れば、中国では共産主義革命を行う時機はまだ成熟しておらず、もっとも重要な目標は共産党党員自身が社会主義を学習し、労働者の意識を高めるということにあり、プロレタリア独裁を提起して厳格な意義での労働運動を行うのはまだまだ早い段階にあったと考えた。一番若い代表であった北京大学の在校生劉仁静は李漢俊の主張に真っ向から反対し、中国共産党はマルクス主義を革命の聖書と見なし、武装暴動を起こして政権を奪い、プロレタリア独裁を確立し、共産主義の実現を最高原則とすべきだと考えた。中国共産党はマルクス主義の研究機関であるだけでなく、労働運動を積極的に行い、共産主義の革命のため十分な準備もすべきだとも考えていた。しかし、李漢俊は劉仁静の「プロレタリア独裁を闘争の直接目標とする」という言い方、及び張国濤の「各国の情勢にかかわらず、プロレタリア独裁を行うべきだ」という言い方に賛成していなかった。⁽⁶⁾参加代表では陳公博が李漢俊の観点に賛成したが、ほかの人々は反対だったため、結果的にプロレタリア独裁を基本的方針とする議案が可決された。

特に「孫中山をはじめとする広東政府及びほかの革命組織を支持するか否か」、「共産党党員が広東政府の議会議員及び政府機関の職務を務めることは認められるか否か」という議題に関しては、激しい論争が展開された。李漢俊は、共産党党員が議員となり、政府機関の職務を務め、普段の職業を秘密活動と結びつけるべきだと主張した。共産党は適当な成員を選んで資本主義政権の議会

に参加させ、又は資本主義政権の官員となり、共産主義者の思想を宣伝し、プロレタリア革命のため準備をすべきだとの考えである。この考えに陳公博、李達などは賛成したが、劉仁静は明確に反対し、国民党及び議会活動に多くの幻想を抱えるべきではないと主張した。張国濤は「どの政党とも連合しない」と言明し、さらには国民党の南方政府が北洋政府と「同類の悪党」であると考えた。さらに李漢俊は現在の動乱の中で、「孫中山氏の革命運動を支持すべきである」、「国民党を援助すべきである」という意思を示したが、張国濤の反対によって、最終的な決議は「現在のほかの政党に対して、独立・攻撃・排他の態度を取るべきである。政治闘争の中で……私たちは終始完全に独立した立場に立ち、プロレタリアだけの利益を守り、ほかの党派と何の関係も構築すべきではない」となった⁽⁷⁾。その他、李漢俊と李達や陳公博は「学生や知識人と連合し、中央集権の独裁方針を取らない」と主張し、包惠僧・張国濤の主張する「都市の労働者を団結し、革命を通じて中央政権を確立する」という観点に反対の立場を取った。

「一大」後、代表たちは各地で活動を展開した。1922年春、李漢俊は武漢の大学で教職に就くと、多くの学生が彼の授業に集まった。また当地の共産党組織と連絡し、よく学生を率いて労働者を訪問し、「権利」と「義務」の意味を説明し、団体交渉の重要性を強調すると同時に、ストライキを行い、外国資本家と団体交渉を行った。1923年2月、李漢俊は学生を率いて京漢鉄道総工会結成大会に参加し、張国濤も大会に出席した。この大会では李漢俊の強い反対にもかかわらず、張国濤の煽動の下、軍閥呉佩孚に「10項目の要求」をつきつけた。結果的に武力弾圧を受けて多数の労働者が虐殺された。李漢俊は事前に情報を得、北京へ逃れ北京政府教育部分の職務を務めたが、その後まもなく中国共産党の党中央から除名される通知を受け取り、同年5月5日、李漢俊は「離党申請」を提出した。

1924年、孫山中はコミンテルンの支持で共産党黨員の国民党への加入を認める「国共合作」を実施したが、翌年孫中山が死去すると国民党の内部で左右両派が激しく対立し、北伐を指揮する蒋介石は南京・上海を占領した後の1927年4月12日に共産党を徹底的に弾圧しはじめた。まず北京で、中国共産党「三大」・

「四大」の中央委員に当選した李大釗は奉天派の軍閥張作霖によって殺害された。再び武漢に戻った李漢俊は引き続き大学に就職するとともに、湖北教育委員会の職務を務め、同年9月10日、国民政府湖北省改組委員会の委員となった。その期間に「漢口民国日報」紙上で何度も文章を発表して中国共産党を強く批判し、また共産党員が共産運動を国民党内で続けることをやめるべきだと提案したが、「分共」政策を実施した武漢国民政府に認められなかった。それにもかかわらず、南京国民政府からの軍隊は11月14日に武漢に攻め込み、共産党員、国民党左派及び革命の支持者を虐殺した。日本租界に隠れた李漢俊も逮捕され、17日の夜に殺害された。

彭湃は1923年7月から1925年まで、広州で農民運動講習所を設立すると同時に中国共産党広東区委員会の委員を務めた。1927年5月の「五大」の際、中央委員に当選し、10月海陸豊県で武装蜂起を指導した。1928年7月、「六大」の際、中央政治局委員に当選したが、1929年8月、逮捕されて殺害された。

周仏海は「一大」後日本へ戻って留学を続け、1922年夏、「第七高等学校」を卒業し、京都帝国大学経済学部に入學した。成績は優秀であったが、河上肇が反対する「早熟社会革命」を受け入れ、中国は共産主義革命を受け入れるには時期尚早であり、マルクス主義は中国の国情に合わないと考えた。1924年6月、広東国民党中央宣伝部長の戴季陶の招きに応じ、卒業前に広東へ赴いて宣伝部秘書を務め、また広東大学で教職に就いた。その後中国共産党に離党要求をおこし、同年秋、中国共産党中央は彼の要求を受け入れた。⁽⁹⁾1926年3月、周仏海は京都帝国大学を卒業した後帰国し、国民政府武漢中央軍事政治学校の秘書長兼政治部主任を務め、1932年、国民党の特務組織「藍衣社」の設立に参画し、江蘇省政府委員兼教育庁長を経た後、1935年国民党中央宣伝部副部長に就任した。1938年12月、汪精衛とともに南京の偽政権の成立に参加し、この政権の行政院副院長、財政部部長、上海市市長を歴任し、戦後無期懲役の判決を受ける。1948年2月、収監中に獄死した。

陳独秀は中国共産党「二大」、中国共産党「三大」で中国共産党中央執行委員会の委員長に当選し、中国共産党「四大」、中国共産党「五大」では中国共産党中央委員会総書記に当選した。その後彼の思想は右傾化し日和見主義へと

変わり、農民や都市の大小のブルジョアジーや、特に武装化した彼らに対してリーダーシップをとるのをやめ、国民党右派の進攻に対して妥協投降の政策を取った。国民革命が失敗した後はトロツキズムと批判されて総書記の職務を解除された。その後、トロツキズムの観点を受け入れ、党内で小組織を作りながら活動を行い、1929年11月、中東路事件の問題で中国共産党中央に対する公開状を発表し、党籍を除籍された。同年12月、81人が署名する陳独秀とトロツキーに対する左翼反対派の綱領としての「我々の政治意見書」が発表されると同時に、陳独秀は上海でトロツキズム組織である無産者社を結成し、刊行物『無産者』を出版した。1931年5月、中国の各トロツキズム組織の「統一大会」に出席し、中国トロツキズム組織の中央書記に選出された。1932年10月、上海で国民党政府に逮捕され、判決を受けた後南京模範監獄に収容された。1937年抗日戦争が全面的に勃発した後に出獄し、1942年四川省江津県で病死した。

共産党の結成初期、李達は陳独秀と密接な交流を持っていた。1922年7月、中国共産党「二大」で、李達は「中国共産党のコミンテルン加入に関する決議案」、「民主的連合戦線に関する決議案」に対して意見を保留し、コミンテルンへの加入だけでなく、国民党との党外協力も認めなかつた⁽¹⁰⁾。そのため、中央局宣伝主任の職務を辞め、その後長沙へ行って毛沢東が創建した湖南自修大学の校長を務め、1923年4月、毛沢東とともに『新時代』月刊を創刊し、編集長となった。同年の夏、「一切帰国民党、一切経過国民党」を主張する陳独秀との間に対立が生じ、陳独秀との連絡を断ただけでなく、党組織からも離党した。1923年から1926年まで湖南省法政専門学校学監兼教授を務め、1926年には『現代社会学』を発表し、史的唯物論と科学社会主義を系統的に論述した。1927年、中央軍事政治学校武漢分校の政治教官、代理政治総教官兼国民革命軍総政治部編集審査委員会主席に就任した。その後は各地の大学を転々として教職に就き、1935年に専門書『社会学大綱』を発表し、弁証法的唯物論と史的唯物論を系統的に説明し、国内に大きな影響を与えた。1949年5月、北京へ赴いて中国人民政治協商会議第一回全体会議に参加し、全国政治協商委員に当選した。同年12月、中国共産党中央の批准を経て、改めて中国共産党に加入した。1950年から1952年まで湖南大学の校長を務め、1953年から1966年まで武漢大学の校長を務

めた。「文化大革命」の中で強く迫害され、1966年8月死去した。

1921年8月、極東各国の共産党及び民族革命団体第一次代表大会を開くためにコミンテルンは張太雷を東京に遣わし、施存統の紹介で日本の共産党と連絡を取りあった。同年12月、施存統と日本共産党の一部は不幸にも逮捕され、東京監獄に10日間以上拘束された後、1922年1月に日本政府より国外追放され、中国に戻った。1922年、初代の青年団中央書記に当選し、1924年上海大学で教職に就き、その後、中山大学・黄埔軍校・広州農民運動講習所で政治経済学を教えた。1927年には武昌中央軍事政治学校教官、政治部主任を務めた。国民革命が失敗した後中国共産党から離党し、その後マルクス主義と革命理論の翻訳に従事し、上海大陸大学教授、広西大学教授を務めた。抗戦期には文科界救国会のリーダーの一人となり、黄炎培・章乃器などとともに民主建国会を組織した。1949年、中国人民政治協商会議第一回全体会議に出席し、また第一回全国政治協商常務委員にも当選し、その後労働部副部長に就任した。1970年11月、迫害にあい死去した。

陳望道は「一大」後中国共産党上海地方委員会書記を務め、労働組合を組織し、「三大」の後に離党した。1923年から1927年まで、上海大学で中国語学科主任、教務長、代理校務主任などの職位に就いた後、復旦大学の中国語学科主任を務めた。1934年9月、『大自』半月刊を創刊し、また魯迅などと共同で大衆語運動を起こし、国民党の「文言復興」運動を厳しく非難した。1940年秋、上海から香港を経て重慶へ赴き、復旦大学の中国語学科の教授を務めた。1942年、新聞学科主任、代理教務長に就任した。1946年6月、上海の復旦大学へ戻り、党組織と積極的に協力しながら教師と学生の革命闘争を保護し支えた。解放前、上海大学で教授交流会の仕事を務め、多くの進歩的教授を組織して反内戦、反飢餓などの民主運動に参加した。中華人民共和国が成立した後、華東軍政委員会文化教育委員会副主任兼文化部長・華東高教局局長・復旦大学校長・中国科学院哲学社会科学部委員・全国人民代表大会代表・全国政治協商常務委員・上海市政治協商副主席・民盟中央副主席・民盟上海市委主任委員などの職務を歴任した。1957年改めて共産党に加入し、1977年3月病死した。

中国共産党の結成及び初期の中国共産党の活動に参加した留日学生の中で、

終始党内で活躍したのは董必武一人しかなかった。彼は「一大」後湖北党組織を發展させ、国共合作時、国民党の省党部の責任者となった。1927年、ソ連のモスクワ中山大学へ留学し、1932年に帰国した後、江西根拠地で中央党校の校長、中央党務委員会書記、最高裁判所の裁判長などの職務を歴任した。1934年、長征に参加して陝北へ赴き、中央党校の校長・陝甘寧辺区の代理主席などの職務を歴任した。1938年、「六大」中央委員に選出され、「七大」から「十大」で中央委員・政治局委員に当選した。建国後、中央財政委員会主任・政務員副総理・政務院政法委員会主任及び最高裁判所の裁判長・全国政治協商副主席・中国共産党中央監察委員会書記・中華人民共和国副主席及び代理主席を歴任し、1975年4月に病死した。

三、「国家のアイデンティティー」から「階級のアイデンティティー」へ

ある意味で留日学生は中国共産党を結成したと言えるが、数多くの人はやがて共産党から離れさらには共産党の矢面に立つようになった。なぜそういう現象が生じたのだろうか。第一に、中日両国の伝統的な文化の差異と強い関係がある。留日学生は「民族国家」と「国民国家」の間で迷っていた。大量の留日学生が出現したのは、甲午中日戦争で清朝が敗北した後、日本に注目し日本から学ぼうとしたからである。その他の主な原因は参考文献に引用した張之洞の『勸学篇』の中で、「遊学するのなら、西洋よりも東洋が良い。一、距離が近く費用を節約できる。一、中国に近く分析しやすい。一、日本語は中国語に近く意味が通じやすい。一、西洋の文書を読むのは大変だが、大して必要でないものは日本人がすでに取捨選択している。とりわけ、日本は社会や風俗が近く、ならうのにたやすく、半ばまで行えば倍の効果がある。これが最もよいことだ。」と指摘されたとおりである。そして、「もしもっと突き詰めてみたいならば、そのとき西洋に行けばよいではないか。」とも指摘され、実際に今日まで「社会や風俗が近く、ならうのにたやすい」という誤解は相変わらず存在する。

日本の若い学者である與那覇潤の『中国化する日本—日中「文明の衝突」一千年史』は、内藤湖南の「宋代近世説」を基礎として、21世紀中国の崛起を日本の追いかけるべき目標と見なしている。すなわち近代的工業文明に適應し

ない中国の伝統的社會はかえってグローバル化の過程の中で迅速な發展を遂げたとする。彼によれば、中国の伝統的社會は宋代に形成された。經濟と社會は徹底的な自由化を実現し、政治秩序は特定の勢力によって支配される体制や理想主義理念に基づく統治行為を通じて正統化される。この体制は今日まで変化していない。古代の日本は中国が歴史的にたどった過程を有したが、その後中国的過程から脱出し、最終的に江戸時代に、中国の伝統的社會と明確に異なる日本の伝統的社會が成立した。すなわち日本には權威と權力の分離(中国では、權威が權力と一致する)、政治と道德の分離(政治と道德の一体化)、地位の一貫性低下(地位の一貫性上昇)、農村モデルの靜態化(市場を基礎とする秩序の流動化)、人間關係の集中化(人間關係のネットワーク化)などの五つの江戸時代的な社會的特徴があり、今日まで変化していない、という⁽¹¹⁾。與那覇の觀點は改めて確かめる必要があるが、中日兩國の伝統的文化と社會組織の方式ははっきり異なっていることも争えない事實である。

だからこそ、近代西洋工業文明からの挑戰に應えるとき、日本の伝統的社會は中国の伝統的社會より明らかに優勢であった。簡単に言えば、日本の伝統的社會と社會組織の原理は西洋式の近代的「民主國家」を作りやすいというわけである。それに対して、中国は「民族」と「國家」の間で彷徨った。中国の學術界では、「國民國家」と「民族國家」に関する論争が存在する。英語Nation-stateは兩者の意味を兼ねているが、嚴密には異なり、もし國民國家が個人を單位とする政治的共同体だとすれば、民族國家は血縁と文化に意味をおく民族的共同体である。欧米などの先進型現代國家は前者の側面を強調し、アジアなどの後発型現代國家は後者の側面を重視した。それにもかかわらず、民族が単一的であったことは日本が近代國家に迅速的に發展できた重要な要因であった。満清時代の中国はより複雑であり、そもそも民族が多く、そして少数民族が國家を統治していたので、どのように近代國家を構築するのかという問題は政治的・知的エリートを悩ませる重要な課題であった。

中国の社會と政治の体制に大變革が発生する中で、梁啓超は清王朝の皇室を政治の「裝飾品」とする「虛君共和」を導入すれば、中国の統一を保持することができる」と主張した。梁啓超は早くとも1899年10月15日の『近世國民競争の

大勢及び中国の前途を論ず』の中で次のように定義している。「一国の民を以て、一国の事を治め、一国の事を定め、一国の利を謀り、一国の患を捍がば、其の民、得て亡ぶべからず。是を之れ国民と謂うか」。同様に、孫中山をはじめとする革命家たちははじめ中国で国民国家の構築を目指したが、このような「先民族、後国家」という方法はかえって分裂主義に口実を提供してしまったため、彼は考え方を根本的に変え、「五族共和」の提唱を経て、最終的に「中華民族意識」に帰着した。しかし歴史の発展過程から見れば、イデオロギー的指導で国民を統合するのは極めて困難な事業であった。⁽¹²⁾

より重要な点は、日本は江戸時代に、例えば徳川幕府が「将軍と天皇」「天皇と将軍」という二重二元的政治体制や「参勤交代」「小型華夷秩序」などの内外政策を実施したため、商品経済の基礎のもとに国内市場の形成を推進しただけでなく、初期的な民族主義の意識も出現させた点である。そのため西洋の衝撃に直面したとき、近代国民国家を構築する政策が迅速に取られたのである。具体的に言えば、日本は開国の15年後、明治維新という政治変革が出現し、その後チャールズ・ティリーの言うところの近代国民国家の形成時期における抗争政治—自由民権運動が起き、まもなく明治憲法体制が構築され、甲午中日戦争を通じて最終的に近代国家を完成させた。すなわち日本は明治初期において、「国民」と「国家」の力のバランスのとれた「国民国家」形態を確立し、地方政治権力は国家政府に集約するとともに、国民の帰属意識と自主権利意識を大いに刺激した。⁽¹³⁾中国の状況を見ると、ほかの道を歩んだと言わざるをえない。アヘン戦争が満清の統治階級を刺激したものの、単に西洋を模倣しただけの国家主導による工業化—洋務運動が行われただけであった。甲午中日戦争が失敗した後、民間資本が近代工業を興すことを許しただけでなく、政治変革の重要性も認識した上で、短命な改革である戊戌の変法が出現したが、やがて失敗した。最終的に暴力的な「辛亥革命」を通じて政権の移譲が解決されたが、弱い国家政権は「国民」の力を集めて叫号する力も、民族独立と国家富強という「国民」の2つの欲求を満たす力も持っていなかった。さらに力強い中央政権も出現しなかった。この意味では、張之洞の述べた「西洋の文書を読むのは大変だが、大して必要でないものは日本人がすでに取捨選択している。とりわけ、日

本は社会や風俗が近く、ならうのにたやすく、半ばまで行えば倍の効果がある。これが最もよいことだ。」、いわゆる「東洋を通じて西洋を学ぶ」という言い方は西洋の道を歩む近道であった。だからこそ、日本での社会的現実の影響を受けた留日学生は、「政治的アイデンティティー」と「階級のアイデンティティー」の問題で、共産党を結成する前後の国内の知識人との間で合意を得ることが難しかったのである。

また中日両国の社会の発展段階が異なっていたため、留日学生は「社会革命」と「政治革命」の問題で戸惑っていた。たとえば最初期の留日学生が日本に行った時、日本はすでに近代国民国家になっていた。「大逆事件」により社会主義の学説及び社会主義運動は沈滞状態に陥ったが、マルクス主義の伝播はそれまでと同じく行われ、社会は軍部の桂太郎や政党政治家の西園寺公望が交互に執政する政治段階に入り、その後「大正デモクラシー時代」に入った。特に第一次世界大戦以降、日本の経済社会は迅速な発展を遂げ、工業経済は農業経済を上回っただけでなく、都市化も急激に発展し、市民階層が次第に形成され、共産主義・社会主義を含むさまざまな体制改革運動が行われた。そのため、「普通選挙権」を実現する社会的基礎も固まりつつあった。その他、都市化・市民化の過程の中で、例えば労働争議・失業救済・交通住宅などの社会問題が次第に出現し、それに対して、政府は内務省に社会局・都市計画局などの部門を設置し、かつ『職業紹介法』・『健康保険法』・『賃貸土地住宅法』などの法律を制定した。

これに反して、辛亥革命後、まとまりを失った祖国に直面した留日学生は現実として日本がどのように近代国家を構築したのかを身をもって感じていた。彼らは民衆の国家に対する帰属意識や忠誠心を喚起しただけでなく、さらには社会の各階級の地位と生活を改善しようとした。1918年末、李漢俊は帰国後上海という中国最大の工業センターであり中外資本家の楽園でもある地に住んでいたが、目のあたりにしたのは地獄のような様子であった。すなわち「茫漠とし、くすんでぼろぼろの衣服が風に漂う空。糞尿にまみれ、腐りきった黒い大地。ぼろ布をまとい、黄ばんだ肌と痩せた体、垢に汚れた群衆。ある者は路上をかましく行き交い、ある者は陽光の中で裸になって座り虱を探す。ある者は屋

内でぼろをたたみ、ある者は薄汚れた布団の中で力なくうめく。誰であっても、このような光景は決して地上のものではなく、地獄の光景と思うだろう⁽¹⁴⁾。李漢俊は貧民窟と高層ビルに対する強烈な対比を通じて、社会に極度の不公平と不正を見た。「労働者は社会と文明の母であるのに、社会が受けた恩恵は本来それを得るべき彼らにまで及ばない。社会には、彼らの労働のおかげでビルに住み、綺麗な服を着、美しい妻妾に囲まれ、山海の珍味を食べ、車に乗り、良馬に乗り、一時の快樂のために千金を惜しまないような人もいる。一方で労働者は十分に食べることもなく、温かい衣服もなく、雨風を避けぬ場所に住み、一日の仕事でその日の命を保つばかりである。ひとたび仕事を失えば、為すすべなく凍死や餓死がやってくる」⁽¹⁵⁾。「どうやって今の中国を変えればよいのか。この問題を解決するのは共和制でも君主制の復活でもない。そのような政治改革が中国を変えられなかったことは、過去がこれを証明している。現状もこれを証明している。だからこそ、私はただ社会革命のためだけに力を尽くすのだ」⁽¹⁶⁾。「一大」では、李漢俊も常に労働者を牽引して「革命闘争と出版の自由、集会の自由を獲得するための闘争に参加し」、「労働者の状況を改善し、彼らの視野を広げる」と主張した⁽¹⁷⁾。しかし、李漢俊による学生運動と労働運動を結びつけた社会革命による方式は中国では実現が難しく、彼は1926年に日本の『改造』誌上で発表された論文「中国プロレタリア及びその運動の本質」の中で、四億という人口の中で、ただ200万の労働者だけでは社会変革の使命を遂げることができない、それは中国プロレタリアの悲しみで、中華民族の悲しみでもあると明確に反省している⁽¹⁸⁾。このように、李漢俊は暴力を通じて政権を交代する「政治革命」に賛成しかねたため、中国共産党から離れたのも自然な選択であった。

世界の発展の趨勢も変化した。早くとも辛亥革命前後、中国の思想界には近代国家を構築しようとする動きもすでに出現していた。梁啓超と孫中山の「国民国家」に関する論争である。梁啓超は清王朝皇室を政治装飾品とする「虚君共和」を通じて国家の統一を保持し、国民国家を建設し、国民全体の力を動員して国家の生存を図るべきと主張した。孫中山は最初に民族指標として国民国家を建設し、辛亥革命後の国家の分裂を防止するため、「中華民族」の概念を

提起したが、その後は君主の復活と内戦が絶えず出現する共和危機の中にあった。このような状況下で、中国共産党の結成以前、中国の政治と思想には大きな変化がおこった。欧州での戦争の勃発と資本主義の全面的な危機を経験した1910年代の「思想戦」の知識エリートたちは、1911年以前の欧米を手本とする現代国家構築モデルが、もはや中国の新たな政治主体の文化運動や新たな政治的形態に呼びかける魅力を失い、ロシア革命こそが新たな政治形態としての可能性を秘めていると考えるようになった。⁽¹⁹⁾

実際に、コミンテルンは中国共産党の結成を指導すると同時に、国民党との密接な協力も展開した。コミンテルンの軍事援助の下で、孫中山の「党国モデル」や「党派利益」は広東で勝利をおさめ北京政府を攻撃するための政治資源を獲得したが、「北伐」の過程の中で、国民党は階級闘争や土地革命を主張するコミンテルンと次第に分裂し、中国共産党は「階級アイデンティティー」の立場からコミンテルンの支部となり、行動上もコミンテルンの指示に完全に従い、実質上は旧来とかわらぬ伝統的農民革命方式を踏襲した。象徴的なできごととは、もともと共産党の結成時期においては「無条件にコミンテルンの手当て及び命令を受け入れることに反対する」⁽²⁰⁾ということを明らかにしていた李漢俊が、国民革命後期、コミンテルンの政策や主張、ないしは共産主義に対して疑いを抱いたために「非資本主義」的な三民主義国家に転向し、「農工及び小ブルジョアジーに頼って国民革命を行う」⁽²¹⁾と主張したことである。言い換えれば、この過程の中で「国家アイデンティティー」を追い求めた留日学生は、「階級アイデンティティー」に適應することができず、中国共産党から離れていったのである。

【註】

- (1) 葉偉敏「既存研究中的“中国共产党与日本”—以中国期刊网论文为整理物件」、『常熟理工学院学报（哲学社会科学）』、2011年第11期
- (2) 「甲寅」第一卷第四号。1914年11月10日。譚瑞美『中国共産党を作った13人』新潮新書2010年、95頁より引用。
- (3) 李惠康・李芬芬「李达与中国共产党的成立」、『文史博览（理论）』2011年12月

- (4) 中国社会科学院现代史研究室『中国现代革命史资料丛刊：“一大”前后』(二)，人民出版社，1980年版，第169・292頁。
- (5) 葉永烈「国内翻译<共产党宣言>第一人：陈望道脱党前后」，『人民文稿』2013年11月
- (6) 李丹陽「李汉俊与中国共产主义运动起源」，『史学月刊』2012年第7期
- (7) 李丹陽「李汉俊与中国共产主义运动起源」，『史学月刊』2012年第7期
- (8) 田子渝「大革命失败后李汉俊“抨击”中国共产党之辨析」，『党史研究与教学』2012年第4期
- (9) 竇春芳・苗休君「周佛海与中国共产党的创建」，『江西广播电视大学学报』，2013年第4期
- (10) 任向陽・李斯「李达脱党原因新探—与苗休俊先生商榷」，『衡阳师范学院学报』，2012年第2期
- (11) 與那覇潤『中国化的日本—日中“文明冲突”千年史』，广西师范大学出版社2013年，第40-42頁。
- (12) 王柯「国民国家与民族问题—关于中国近代以来民族问题的历史思考」，『世纪中国』2003年3月。
- (13) 郭台輝「中日的“国民语义与国家构建—从明治维新到辛亥革命”」，『社会科学研究』2011年第4期
- (14) 「跑到内地才睁开眼睛么？」，『新青年』9卷1号，1921年5月1日
- (15) 「优待学生与优待劳动者的意义及可否」，『民国日报』副刊『觉悟』，1920年3月18日
- (16) 『芥川龍之介全集』第5卷，岩波書店1977年版，第48-49頁。
- (17) 「中国共产党第一次代表大会」，『共产主义小组』上，中共党史资料出版社1987年，第53頁。
- (18) 『改造』夏增刊，现代支那号，大正十五年七月号。谭璐美『中国共産党を作った13人』、新潮新書2010年、190頁、からの引用。
- (19) 汪暉「文化与政治的变奏：战争、革命与1910年代的“思想战”」，『中国社会科学』2009年第4期
- (20) 「湖北改组委员会职员登记表」(李漢俊が記入したもの) 1927年9月10日、漢档

12993、台北中国国民党史馆藏，田子渝「大革命失败后李汉俊“抨击”中国共产党之辨析」，『党史研究与教学』2012年第4期

(21) 「李汉俊在省党部之政治报告」，『汉口民国日报』1927年8月31日